人口減少地域における集落維持に向けた住民の想い
―自治公民館活動により育まれた相互扶助が集落維持に与えた影響―

松岡崇暢（地域資源創成学部）

1. はじめに

日本の農山村が抱える諸問題の中で、高度経済成長期以降から顕著になってきた人口減少と高齢化の問題がある。農山村の人口減少と高齢化は、農業や林業の担い手不足を招き、地域資源である農地の耕作放棄や山林荒廃を招いている。農地や山林の荒廃は、多面的機能の低下を引き起こし、農山村だけではなく都市にまで影響を及ぼすことから日本全体の問題と認識し解決を図る必要がある。

農山村の人口減少と高齢化は、地域資源の荒廃だけにとどまらず集落生活にも影響を与えた。住み続けてきた屋敷は放棄され、崩壊や空き家となっている。また、集落内の道路補修、草刈り、農業用水路の維持管理などの普請[1)]への参加者は減少し、集落活動の停滞が危惧されている。その他に、気候風土に根差し日常生活を支えてきた郷土料理などの食文化、日常生活に根差した信仰や神事、非日常を楽しむ祭事などの伝統文化の継承が難しくなっている。

今後、日本の農山村は人口減少と高齢化は益々進行し、集落機能の機能不全が懸念されている。集落機能は、集落住民同士が共に助け合いながら発揮させてきた。資源管理と生産補完と生活扶助の機能を有し、1 つの機能が欠けても調和を崩し農山村生活に支障をきたしてしまう。そのため、集落住民だけで集落機能の維持が難しい場合は、何かしらの補完が必要だ。

集落機能の補完を先行研究から整理する。小林らは、集落機能を充分に発揮させるため、他出子の集落維持活動への関与実態を明らかにしている（小林・筒井 2018）。また、船戸は他出子が集落との関わり方やその意識を明らかにしている（船戸 2020）。これらの研究から他出子は、集落との関係性が希薄であり、集落機能を維持する担い手としての過度な期待は厳しいだろう。集落外からの労働力や担い手の補完は、現実的ではないようだ。

次に、集落内での集落機能の維持に向けた、経済的なインセンティブの可能性を探っていく。北村は中山間地域等直接支払制度を活用することで、集落機能が活性化するのか明らかにした（北村 2014）。結果として、集落で生活する壮年人口が 5 人以下では集落機能の活性化に限度があるが、その一方で集落での話し合い回数が増えることを指摘している。

人口減少と高齢化が進行する集落では、取り組む活動が減少している。集落住民が助け合い、必要に応じ外部支援を受けることで集落機能を保ち集落維持の可能性を探っていく。劉によると、集落に対する住民の危機意識、地域への愛着、住民間の交流と団結心、地域リーダーの 4 つの要因が集落の活力に欠かせないと指摘している（劉 2003）。この 4 要因に至る過程は、地域性や集落特性の影響が大きく、その過程を明確にすることで、集落維持に対する想いや今後の地域づくりに必要なことが見えてくると考えられる。集落維持に向けて、人の生活を幅広く、尚且つ掘り下げて集落内での人の関わりや行動や活動の意義を捉えていく。

ここで綾町が 1966 年に導入した自治公民館制度が集落住民主体の地域づくりにどのような影響を与え、その波及効果を先行研究により整理した。岩佐は、綾町の自治公民館活動に着目し、人間の能力形成と生活の学び内容や学習方法から地域づくりに果たすメカニズムとし

て「自然とのかかわり」と「人としてのかかわり」が対になっていることを明示している（岩佐 2013）。また、堀口によると綾町では綾川総合開発事業により一時的に人口は増加したが、事業修了後は大幅な人口減少を招き地域産業と生活基盤の立て直しが急務となった。そのため、綾町住民の自発的な創意と工夫が求められ、綾町が自治公民館活動を導入した。自治公民活動の展開により、集落で考える力を養い住民の自立を促し「一坪菜園運動」や「一戸一品運動」へと地域経済活動の推進が有機農業の綾町につながったのである。この展開は、大分県の「一村一品運動」に大きな影響を及ぼした（堀口 2013）。

集落での生活を維持していくために、相互扶助の関係を構築している綾町倉輪地区に着目し、前述した劉が指摘した4要因は過去と現在に至るまで、どのような過程を経て形成されてきたのか考究する（劉 2003）。なお、集落の活性化は難しいが、10年後も引き続き現在と同様の生活を送るために必要な支援策を綾町、倉輪地区住民、宮崎大学が一緒に検討し集落ビジョンを策定した。集落ビジョンは倉輪地区住民の意向に寄り添い集落維持を目指している。集落維持に関する先行研究には、今の支援や未来に着目した研究はあまり見られない。そこで本研究は時間軸を取り入れ、過去のきっかけ、現在の困り事や地域課題、未来に向けた倉輪地区住民の意向や想いなどを集約し、集落維持要因を明らかにすることを目的とする。

2. 研究対象の概要

2.1 宮崎県綾町の概要

宮崎県綾町は、県内中央部の中山間地域に位置している。総面積の 79.5%を森林が占め、20.5%の平野部に住居と農地が広がっている。豊かな自然環境を有し国内最大級の照葉樹林帯を形成していることから、1982年に九州中央山地国定公園の指定を受けている。自然と共生した地域づくりの取り組み成果を受けて、2012年にユネスコエコパークに登録されている。

先人が育んできた豊かな自然環境を守るため、家畜糞尿処理施設の設置や綾町全域屎尿の堆肥化などを推進してきた歴史がある。他にも、自然共生に向け有機農業を普及させるため自然生態系農業の推進に関する条例を制定し、有機野菜の販路拡大を促進させるため直売所を開設している。これらの取り組みにより、有機農業の町として知名度が高まり、有機農業で就農を目指す移住者が増えていた。

2.2 綾町が展開してきた自治公民館活動

綾町が展開してきた自治公民館活動の契機は、綾町の危機的な状況を乗り越えられる地域づくりの担い手を育成する必要があったからである。戦後に林業の機械化による雇用が減少した。当時の綾町は、林業は基幹産業であったため、林業従事者の減少により、地域経済は低迷し住民の転出が相次いだ。1966年に照葉樹林帯を含む、綾町内の森林伐採計画が持ち上がった。綾町にとって林業の雇用創出機会であったが、豊かな自然環境を将来に残すことを選択し、森林伐採計画に反対する立場を取った。自然環境を守ることは、地域経済が疲弊する中で雇用創出機会を逃すことで、更なる転出増加の危機を招く恐れがあった。この危機を乗り越えるために、全ての住民が参画し自治の心を取り戻す自治公民館活動を展開し、みんなで将来展望を描く体制づくりを推進したのである。

佐藤は町おこしに着目し生活者の視点から、綾町のフィールドワークから得られた知見として、町おこしに関わる人々の視点が欠如する傾向であったと問題提起をしている。地域住民の紐帯を促し得る場と評価を加え、比較的小規模の範囲で行われる町おこしは、住民の連携を深め新たな紐帯を促す協働の場や多くの人々

が関わることで紐帯を促した事を示した（佐藤2008)。まさに、自治公民館活動の範囲は、単独集落もしくは複数集落の地区単位で取り組み、内容についても住民生活をベースに社会経済活動まで及んでおり、住民同士のつながりを踏まえると一般的な町おこしと共通の成果が得られると考えられる。

2.3　自治公民館活動を推進してきた倉輪地区の概要

1967 年からスタートした綾町の自治公民館活動は、全住民が参画し地域づくりを展開していくことを目的としている。綾町内の 22 地区すべてに公民館を建て、地区内の会合、公民館文化祭、集落住民の親睦や祭事、普請の準備など集落住民が集まる自治公民館活動の活動拠点となっている。集落住民が自尊心を持ち活発であった自治公民館活動であるが、最近では人口減少や高齢化の影響を受け、役員の担い手不足や参加住民の減少により活動が低迷している地区がある。

高齢化と人口減少が進んでいる自治公民館地区の中に、倉輪地区がある。倉輪地区は、倉輪集落、陣之尾集落、広沢集落、釜牟田集落の 4 集落で構成されている。日常生活の支え合いは、各集落単位で行われ自治公民館活動は 4 集落で協力して取り組んでいる。

3. 調査方法

3.1　倉輪地区を対象とした 2 つのプロジェクト

本研究では、「綾の肖像プロジェクト」と「集落ビション策定」の 2 つのプロジェクトに取り組み、プロジェクトを通じ得られた知見から考究した。

綾町の先人は、自然環境と共生の生活を営み、豊かな自然環境と生態系を守りながら文化的、経済的に持続可能な地域社会を築いてきた。これらの取り組み成果は、ユネスコエコパークに登録され評価されてきた。長年の自然環境と共生した生活と自治公民館活動が住民主体の地域づくりの礎になっている。綾町において人口減少と高齢化は顕著な問題で、特に中心部から離れた山間地域にある 6 地区 [2] では、40 戸を下回り消滅の危機に瀕している。

消滅の危機を受けて、各地区が継承してきた歴史や文化、先人の生活実態や想い出を失う前にデジタルデータ化し、社会への発信と後世に残すことを目的に、2020 年から 3 か年計画で「綾の肖像プロジェクト」を立ち上げている。「綾の肖像プロジェクト」で得られた成果は、綾町の WEB サイトの掲載 [3] に加え綾町史作成や教育現場での活用、地区の課題解決などの活用を目指している。

1 年目の 2020 年は、倉輪地区を対象とし「綾の肖像プロジェクト」がスタートした。開催概要は表 1 にて示している。本来の実施計画では、倉輪地区全体で実施予定であったが、新型コロナ渦の影響により集落ごとの実施に変更し、感染予防を徹底して少人数で行った。釜牟田集落の住民は、倉輪地区の自治公民館館長を務めら

表 1　肖像プロジェクトの開催概要

集落名	日時	開催場所	参加人数
倉輪・釜牟田	2020 年 11 月 20 日（金）18：30〜20：00	倉輪公民館	7 名
広沢・釜牟田	2020 年 11 月 27 日（金）13：30〜15：00	広沢公民館	7 名
陣之尾・釜牟田	2020 年 11 月 27 日（金）18：30〜20：00	陣之尾公民館	6 名
倉輪・釜牟田	2020 年 12 月 4 日（金）18：30〜20：00	倉輪公民館	5 名

※筆者により作成

れており、全ての開催に参加されており参加人数にもカウントしている。「綾の肖像プロジェクト」の実施体制は、綾町と宮崎大学地域資源創成学部農村社会学研究室に所属する教員と学生で構成されている。

デジタルデータ化する収集記録資料は、綾町での暮らし、地域活動、大切な物や事などが記録された写真や資料である。写真の廃棄や散逸危機の可能性があり、20 世紀の生活実態を後世に残すためデジタルデータ化は急務の課題である。また、写真だけを収集するのではなく写った物や事をきちんと把握し発信するため、持参された写真を集落住民と一緒に見ながら、それぞれのエピソードを共通のヒアリングシートを使用しヒアリング調査を実施した。ほとんどの参加集落住民は、時間を忘れて楽しそうに昔話に花を咲かせていた。倉輪地区のデジタルデータは、綾町の WEB サイトで当時のエピソードも交えて自由に閲覧することができる。

もう 1 つのプロジェクトは、「集落ビション策定」である。表 2 にて、「集落ビション策定」のヒアリング概要を示した。

「綾の肖像プロジェクト」のヒアリング調査で明らかになった、昔ながらの生活実態を踏まえて、これからの 10 年間に渡って現在営んでいる社会経済活動や生活が継続できるように現状把握と将来の不安、家族や地縁で対処できること、必要な支援、集落や地区の将来展望、後世に残したい集落や地区の宝、永住判断などの 6 項目をベースとしたヒアリング調査を実施した。

大多数のヒアリング項目は、プライバシーに配慮すべき内容であることから、綾町職員と筆者のみで実施した。「集落ビション策定」の報告書には、個人が特定されないように配慮し取り纏めている。

表 2　集落ビジョン策定のヒアリングの開催概

回数	集落名	日程	開催場所
1 回目	広沢・釜牟田	2021 年 3 月 5 日	広沢公民館
2 回目	倉輪	2021 年 3 月 22 日	倉輪公民館
3 回目	陣之尾	2021 年 3 月 30 日	陣之尾公民館

※筆者により作成

4. 昭和時代の倉輪地区の生活実態

4.1　綾の肖像プロジェクトにより明らかになった昭和時代の倉輪地区の生活実態

倉輪地区を構成する倉輪集落、陣之尾集落、広沢集落、釜牟田集落で実施された、「綾の肖像プロジェクト」で得られた知見を踏まえ、倉輪地区内で営まれてきた昭和時代の生活実態を整理し考究を加えた。各集落で継承されてきた伝統文化、ヒアリング対象者の子ども時代の生活実態、各集落の社会経済活動や生活実態を取り纏めた。なお、倉輪集落のみ参加集落住民や持参写真の枚数が多いことから、2 回ヒアリング調査を実施した。他の集落は 1 回のみのヒアリング調査であった。

1 回目の「綾の肖像プロジェクト」による倉輪集落のヒアリング調査結果を表 3 にて示した。

伝統文化では、狩猟、結いの心、さのぼり[4]、馬頭観音などが挙げられた。豊かな自然環境との共生した山村生活では、時に恵み、時に厳しさを与えられる。日々の生活の中で豊作祈願、役用動物への感謝、色々な祭りを通じた祈りが現在まで継承されている。神道を信仰する集落住民が多い集落なので、日常生活の中で神様は身近な存在であったようだ。

子ども時代はでは、遠方の小学校に通学する必要があったため、集落内の子ども達は協力し、時に寄り道や山で遊びながら登下校をしている様子を聞き取った。当時は義務教育であっても教科書を購入する必要があった。家庭の経済事情を踏まえ、集落内で年上の子から年下の子

表 3　倉輪集落における肖像プロジェクトのヒアリング結果　1 回目

伝統文化	狩猟（イノシシ・トリ）	結いの心	豊作祈願の、さのぼり	馬頭観音祭	多かった祭り
子ども時代	魚釣りや川遊び 集落に子どもは 50 人程いた	8km あった小学校通学 1960 年頃に中学校が移転	夫と同じ集落で生まれ育つ バス代の 5 円でお菓子を買い歩いた	夫から教科書をもらった	家の手伝いで忙しい
集落の生活	20 歳で嫁いだ トロッコを活用して運搬 集団就職で集落住民が減る	集落によって言葉が異なる 田植えはみんなで作業 みんなで道普請	炭焼き・林業・農業 さのぼりは、楽しみ	踊りを習う 農作業後は温泉で慰労会	公民館文化祭の想い出 集落住民で集まり飲食

※ヒアリング調査から筆者が作成

へと受け継がれてきた。年下の子が多い時は、全教科の教科書が手に入らないこともあったようだ。現在の配偶者から教科書を譲り受けた集落住民がおり、当時からの良好な人間関係が構築されてきたのである。集落住民同士の硬いつながりが見えてくる話である。

集落の社会経済活動や生活実態を見ていくと、炭焼き、林業、農業などの従事者が多かったようだ。田植えは手作業で行っており肉体労働で厳しく人手が必要なことから、集落住民総出で全ての集落内水田の田植えを行っていた。しかし、収穫は各家単位で行っていたようだ。さのぼりと呼ばれる、田植え後は持ち寄った料理で昼食を取った。昭和後期になると、料理の持ち寄りから近所の温泉に集落住民みんなで出掛け慰労会を開いていた。助け合わなければ集落での生活が成り立たず、さのぼりや温泉などの楽しい行事を取り入れながら、自然と共生した生活を営んできたのである。これらの行事を通じ、集落住民間の結束力が高まったと考えられ、強固な相互扶助の関係性を保つのに一役買ったのである。しかしその一方で、集団就職による若い世代が綾町外へ転出し、倉輪集落からも多数の転出が見られたようだ。

2 回目の「綾の肖像プロジェクト」のヒアリング調査では、1 回目の倉輪集落におけるヒアリング調査で充分に聞き取りができなかった写真を主に取り扱い、結果を表 4 にて示した。ヒアリング項目は 1 回目と同様である。

伝統文化では、主に冠婚葬祭の様子を聞き取ることができた。葬儀については神道を信仰している集落なので、葬儀で神楽を舞い、お墓までお金を撒きながら参列する習慣があった。冠婚葬祭では、和服を着用し自宅で行い集落住民全員が参加していた。神道信仰集落なので、生活に根差した神様を多数祀っている。山の神様は集落住民の高齢化により、祀ってあった山への参拝が厳しくなったことを受け、倉輪公民館の横に祠を動かしている。その他にも、五穀豊穣の田の神様、家畜の神様である馬頭観音など

表 4　倉輪集落における肖像プロジェクトのヒアリング結果　2 回目

伝統文化	自宅で葬儀	昔の葬儀は、お墓までお金を撒いた	葬儀で撒いたお金を参列者が拾った	冠婚葬祭やしきたりは、倉輪地区住民が参加	昔は土葬
	倉輪公民館の横に、山の神様の祠を動かした	旧暦 9 月 16 日は、山の神様のお祭りを行った	神様のお供え物は花が多い	結婚式は自宅で行い、着物を着た	葬儀で神楽を舞った
子ども時代	ビー玉を使った遊び	男の子はパチンコやメンコで遊んだ	女の子はままごとで遊んだ	親の炭焼きの手伝い	炭の運搬
	1955 年頃は、貴重なカメラで集合写真を撮影	バスで通学し、運賃は片道 5 円	バス代を浮かし、お菓子を買った	1955 年代の学校は 1 学年 4 クラスあった	食べ物が少なく芋を食べた
集落の生活	敬老会の婦人部で踊った	敬老会の余興は、カラオケや踊りや三味線や手品であった	農家は牛を飼う	自家製の麦味噌	お盆の来客に、鮎の干物の塩焼きを出した
	生活用水は「かけひ」で、滝から水を引いた	集落単位で集会を行った	肥溜めがあった	七夕の頃に倉輪地区全体で草刈り（普請）	薪は貯蓄
	囲炉裏を囲んで食事	有機農業は倉輪地区が起源	畑作の水に困らなかった	棚田の水管理の話し合い	

※ヒアリング調査から筆者が作成

を信仰している

子ども時代では、主に子ども時代の遊びを聞き取りした。男の子は、ビー玉、パチンコ、メンコなどで遊び、女の子はままごと遊びが多かったようだ。子ども時代は遊びだけでなく、家の手伝い、炭焼き、農業などを親と一緒に従事していた。子ども時代のお手伝いの中で、最も重労働であったのは水汲みであったようだ。その重労働から解放されるため、「かけひ」と呼ばれる装置を作成し、滝から水を引き込んだ。

集落の生活では、当時の食生活が見えてくる。食生活は普段は質素で鮎を捕まえて干物として貯蔵し、来客時に振る舞っていた。その他に、麦味噌を手づくりしていた。地域経済活動である農業では、農耕用の牛を飼い、棚田の水管理に関する会合を重ね、草刈りの普請を共に作業し、有機農業を試行錯誤するなど倉輪集落住民同士で協力しながら工夫を重ねている。厳しい肉体労働の慰労として、囲炉裏を囲んでの食事、カラオケ、踊り、三味線、手品などの余興に興じていた。

次に広沢集落における「綾の肖像プロジェクト」のヒアリング調査結果を表 5 にて示す。

伝統文化は、仏教を信仰し 1950 年代までの

表 5　広沢集落における肖像プロジェクトのヒアリング結果

伝統文化	仏教信仰	山の神様を祀った	1950 年頃までは、冠婚葬祭は自宅	埋葬は土葬
	茅葺き屋根の家			
子ども時代	山を越え登下校	小学校は片道 2km	子どもだけで公民館を掃除	川遊び・魚釣り（魚は焼いて食べた）
	教科書はもらった			
集落の生活	1967 年から月 1 回訪問診療の実施	1982 年に広沢公民館完成	月 1 回は、集落の会合を行った	集落住民が集まるとお酒を飲んだ
	昔の公民館に囲炉裏があった	1970 年代に山から水を引いた	道普請や田植え後は温泉に行った	2000 年頃までは、集落住民みんなで田植え
	地区対抗のスポーツ大会	川で洗濯	水汲み	集落内の側溝を大掃除
	現在の道普請参加者は 6 名	養豚・農業・林業に従事	田んぼで相撲大会	公民館文化祭で団子や餅を販売
	囲炉裏を囲み食事			

※ヒアリング調査から筆者が作成

葬儀は自宅で行い土葬していた様子を聞き取った。仏教信仰ではあるが、山の神様を祀っていた。

子ども時代では、片道約 2km 離れた小学校まで通学していた。長時間の通学を余儀なくされていたが、寄り道や遊びに夢中であったようだ。子ども時代の遊びでは、川で遊ぶ機会が多く、魚を捕まえて焼いて食べることもあったようだ。楽しい想い出だけでは無く、子どもだけで広沢公民館の掃除などの集落に対するお手伝いを行っていた。

昭和時代の広沢集落は、林業や農業に加えて養豚などの畜産に従事する住民もいた。集落住民みんなで、普請や集落全体の水田に田植えを行っており、協力体制は充実していた。普請や田植え後は、近所の温泉にみんなで出掛け、地区対抗のスポーツ大会への参加、月 1 回の会合を開きその後は囲炉裏を囲んで飲食をするなど厳しい自然と共生した生活の中でみんなと娯楽を満喫していた。2000 年頃までは、集落住民みんなで田植えを行っていたが、人口減少や高齢化、耕作放棄地の増加などにより今では各戸で行うようになっている。今でも普請は、集落住民みんなで取り組んでいるが、参加者は 6 名となってしまった。川での洗濯、水汲み体験、1970 年代頃に山から水を引くなど、水に関する記憶を幾つか聞き取りすることができた。女性への聞き取りでは、子ども時代の大変であった

表 6　陣之尾集落における肖像プロジェクトのヒアリング結果

伝統文化	さげもんを送り合う風習	桃の節句は祝い歌や手踊りで祝った	主な祝いや行事：桃の節句・端午の節句・七五三・小学校入学成人式	お祭りには、秋祭り・年神様参り・氏神様参りがあった
	1950 年代の家には、土間、かまど、調味料壷、八畳 2 間、外にトイレがあった	馬頭観音を祀り動物の安全を祈願	山の神を祀った	
子ども時代	桃の節句のごちそう	牛を飼う家が多い	親世代の時はみんなが貧しい	小学校まで約 7 ㎞、片道 1.5 時間かかった
	獣道の利用	陣取りゲームを外で遊んだ	いかだくだりの行事	子ども会でキャンプ
	水汲み、風呂焚きを手伝う	日曜日は、タバコを買いに行った	農繁期に手伝いのため小学校は 1 週間休み	チャンバラ・木登り・かくれんぼの遊び
	通学中は、クリやアケビを拾った			
集落の生活	40 年ほど前の選挙出発式	当選後の祝福の食事会	季節の行事や年末年始に集落住民が集まった	60 年ほど前のひな祭りの写真
	旧野尻町から陣之尾集落に嫁を迎え入れることが多い	集落住民の娯楽はカラオケ	牛・豚などの畜産と畑作のため開拓	台風で倒木があり、自分たちで撤去
	草刈りの賦役	基本は自給自足の生活で、肉や魚はあまり食べない	集落にある田んぼを集落住民で順番に田植え	草刈り・小麦刈り・山菜採りをした
	昔は養蚕が盛ん	農業は、甘藷、いも、菜種を作付け	リアカーで野菜を売りに行った	

※ヒアリング調査から筆者が作成

お手伝いや家事の記憶が鮮明に蘇り、特に水が引かれた時の喜びは大きかったようだ。広沢集落は、綾町の中心部まで約 11㎞ 離れており車での移動でも 50 分程掛かる。病院もなく医者も不在なことから、1967 年から現在まで月 1 回の訪問診療が続いており、広沢集落住民の安心につながっている。

陣之尾集落で実施した、「綾の肖像プロジェクト」に関するヒアリング調査結果を表 6 にて示した。

伝統文化では、節句や人生の節目のお祝いの様子を聞くことができた。桃の節句や端午の節句、入学式や成人式などの節目には、集落全体で祝う風習があった。お祭りは、秋祭りや年神様参りや氏神様参りなどの祭事を執り行い、山の神や馬頭観音を祀り現在まで継承されている。

子ども時代では、節句のお祝いでの御馳走の想い出、水汲みや風呂焚きや買い出しなどの辛いお手伝いなどを聞き取った。子供時代の遊びとして、チャンバラや木登りやかくれんぼなどして遊んだようだ。小学校までは片道 7km あり、登下校中にクリやアケビを拾い寄り道を楽しんでいた。親世代が開拓し入植していることから、子ども時代は貧しい集落住民は多かった。農耕用の牛を飼育し、農業に従事する集落住民も多いことから、子どもは牛の世話などをしていた。水不足は深刻で、日常生活に支障があり稲作は断念している。畑作で甘藷などのイモ類、菜種などを作付けしていた。次に養蚕にシフトし、その後は牛や豚などの畜産と畑作を中心とした農業を展開していった。基本的に自給自足の生活を営み、肉や魚などを口にする機会はほとんど無かったようだ。季節の行事や年末年始は公民館に集落住民が集まり、宴会やカラオケなどの娯楽を楽しんでいた。

「綾の肖像プロジェクト」として、倉輪地区を構成する倉輪集落、広沢集落、陣之尾集落、釜牟田集落の 4 集落ごとに伝統文化、子ども時代、集落の生活についてヒアリング調査を実施した。4 集落の住民は、倉輪地区としての取り組みは一緒に行うが、基本的に集落内で完結した生活を営んでいた。共通して見えてきた生活実態は、身近にお祭りや神様が存在し厳しい自然と共生しその恩恵である農業を助け合う相互扶助の関係を築いてきた。厳しい生活の中で、食事会や温泉や酒宴などの楽しみを取り入れてきた。

幼少期は遠方の小学校へ通学を余儀なくされたが、寄り道や川での遊びなどを通じて子ども時代から現在まで同じ集落で生活する中で、人間関係を深め強い結束力を育んできた。集落住民間の結束力は、長い月日を費やして育み現在に至っている。大人になってからは親世代が行ってきたようにお祭りを行い、神様を祀り相互扶助による農業や普請に集落住民が一緒に取り組む事で、結束力は更に強まったのである。

4.2　現在の 4 集落の生活実態から見えてきた困りごと

倉輪地区を構成する 4 集落住民の現在の生活実態を見ていく。中心部から離れた場所にある倉輪地区は、車を利用し近い集落で 30 分程度、最も遠方の集落で 50 分程度掛かる。買い物や通院などの日常生活には、車の運転、送迎サービス、相乗りなどの移動手段の確保は不可欠である。高齢であっても自ら運転する住民は多いが、今から 10 年後を考えると運転免許の返納する集落住民は増えてくると考えられる。運転できる集落住民の減少は、集落での生活を継続する上で大きな支障になるだろう。集落の近くに子や親族が生活しており、定期的に送迎を頼める集落住民も存在するが、子が遠方で生活している集落住民は移動手段の確保が難しくなると転出の可能性が出てくる。

山の生活には日常のライフラインの整備に加えて、自然災害からの復旧が重要である。宮崎県では、局地的な大雨や大型化する台風による自然災害が増えている。4 集落へ向かう道路は舗装されているが、落石や倒木が多く復旧作業の車両通行に大きな影響を与える。そのため、停電や断水によるライフラインの断絶からの復旧に多くの時間を有することから、自然災害を契機に転出の可能性は否めない。自家発電機の購入やチェンソーで倒木処理を行う集落住民はいるが、高齢化が進む中で集落住民側だけ

の対応には過度の期待を持つことは難しい。

平均年齢が 69 歳である 4 集落住民は、健康や介護に関する危機感が強い。月 1 回の巡回診察、社会福祉協議会や病院の送迎サービスを利用しているが、高齢者の独居生活やリハビリテーションを必要とする集落住民の中には、中心部から離れていることで緊急時の対応に不安を抱えている。多くの集落住民は日々の健康づくりの重要性を痛感しており、グランドゴルフや畑仕事などを精力的に取り組み、声を掛け合いながらみんなで参加するようにしている。

以上、今後集落で引き続き生活を営むために、移動手段の確保、自然災害との対峙、健康維持が重要視されており、どのような支援ができるのかが重要であることが明らかになった。

4.3　集落に対する想い

倉輪地区を構成する 4 集落住民に対して、集落ビジョン策定に向けたヒアリング調査を行い、住み続ける集落への想い、後世に残したい宝物、永住意向について聞き取り調査を行った。

自然豊かな 4 集落が残していきたい集落の宝には、照葉樹林、浦之名川の清流、ヤマザクラ、街道、棚田などが挙げられた。子ども時代の魚釣りや川遊びを行った清流は、想い出と共に生態系や綺麗な水環境を残す強い想いが伝わってきた。街道や棚田は、集落住民みんなで普請や田植えを行い維持管理してきた大事な地域資源である。苦楽の想い出と共に生活を支えてきた生産の場は、次の世代に引き継ぎたい宝物である。

伝統文化では、生活に根差した様々な神様の存在から楽しみだったお祭りやさのぼり、今も食べ続けているシイタケ、クリ、味噌漬け、こんにゃく、カニなどの食材が挙げられた。記憶に残る歴史や出来事は、不便な山の暮らしを助け合い育まれた結いの心、農業や養蚕や林業や狩猟などの社会経済活動、開拓による入植など先人達の苦楽の様子が伝わってくる。

永住意向においては、利便性よりも住み慣れた家で過ごすことを希望する集落住民が多数であった。しかし、住み続けるには元気であれば、元気な限りなど元気に体が動くことを条件に付していた。現時点では、高齢であるが体が動く、重度の疾患が無い、夫婦 2 人で生活している場合に永住意向を示すことが多かった。しかし、通院回数の増加や体が不自由などの健康面に不安が生じれば転出を余儀なくされ、子どもが住む中心部や宮崎市内への引っ越しは増えるだろう。特に、子どもが中心部で生活をしていれば、中心部から遠く離れた倉輪地区から転出することに躊躇はしないであろう。実際に綾町内在住の子どもの自宅付近や綾町外への転出を計画している集落住民は存在した。また、現在居住している屋敷の管理は、夫婦であれば問題なく行うことができている。しかし独居の場合は、近隣で生活する子供や兄弟親族の手を借りることも多々あった。独居や子供が遠方で生活している場合や子がいない場合は、将来的に管理が難しくなることを予見し、処分の検討をしている集落住民が存在した。屋敷は私的財産であるため、他の住民や行政によるサポートが難しい現状を見て取れた。空き家問題につながるため、長い目で関係者間での対応が必要である。行政への要望については、ほとんどの集落住民は必要が無いと回答をしていた。その中でも、農地や共同墓地の管理については、行政支援の要望が出されていた。

4.4　相互扶助を育んだ自治公民館活動

綾町では住民主体の地域づくりを推進させるために導入した自治公民館活動であるが、倉輪地区は導入開始時から現在に至るまで活動を続けてきた。楽しみの部分と負担の部分を併せ持つ自治公民館活動であるが、子ども時代から一緒に行動し大人になってからは社会経済

活動を通じ育んだ相互扶助が、強い結束力で集落住民間を結び付けている。相互扶助と結束力は、集落住民が減少し高齢化が進行した現在でも健在である。さすがに活動の質と量は著しく減少したが、健康づくりや普請などは細々と続けられている。活動の延長として、日常的な挨拶や声掛け、公民館での会合など集落住民間の交流を絶やさないで生活してきた。しかし、コロナ渦[5)]の影響で公民館に集まる機会は著しく減少したが、改めて集落住民間のつながりや交流の重要性を再認識することができたのである。

自治公民館活動の継続には、多数の課題が浮上している。まず、集落住民の減少や高齢化により、自治公民館活動の１つである公民館文化祭の倉輪地区単独開催が危ぶまれている。近隣地区との合同開催が解決策として浮上しているが、抵抗感を持つ集落住民は多数存在する。他にも関係人口である綾町外ボランティアなどの受け入れが支援策として浮上したが、最終的に集落住民負担を理解した上で、可能な限り単独開催することに落ち着いている。次に、自治公民館活動の役員の担い手不足が深刻化している。高齢の集落住民からすると、役員は負担が大きいことから引き受けることを躊躇している。上手に若い集落住民へ役員の担い手を引き継いでいくことは、自治公民館活動を継続していく上で不可欠である。しかし、若い集落住民は働き盛りで尚且つ人数が少ない。そのため、過度の負担がのしかかる可能性は否めない。

本研究の問題意識として劉が指摘した４要因が倉輪地区の過去から現在に至るまでに、自治公民館活動や日々の生活を通じ、どのような過程で形成されてきたのか論及する。1 つ目の住民の危機意識は、倉輪地区の人口減少と高齢化や自治公民館活動の活動減少や役員の担い手不足から危機意識を持っていた。日々の生活では、中心部から遠方なことから買い物や通院などの移動負担や将来的に免許返納時の移動手段の確保難から危機意識に加え不安感を持っていた。

次に２つ目の地域への愛着と３つ目の集落住民間の交流と団結心では、子ども時代から一緒に過ごし良好な人間関係を構築してきた。大人になってからは、社会経済活動や自治公民館活動などを一緒に取り組むことを通じ、集落住民の相互扶助を育み強いつながりである結束力を高めてきた。自然と共生した生活を育み、空間としての地域への愛着に加え、集落住民間の交流や団結をベースとした人間関係からの地域への愛着も強いと考えられる。

最後に地域リーダーは、自治公民館館長に置き換えることができるだろう。

以上の４点から、倉輪地区では地域の活力を保ってきたことは明らかだが、次の段階である世代交代や人口減少を踏まえ倉輪地区をどのように存続していくのか検討する段階に入ったのである。次章で倉輪地区の存続に向けた支援について論究していく。

5. おわりに

5.1　倉輪地区および４集落維持に向けた集落住民の想い

長い間住み続けてきた４集落住民達は、集落に対してどのような想いを抱いているのだろうか。綾町は支援策として４集落維持に向けて、3 つの可能性を模索し、集落住民と話し合いを行っている。1 つ目は移住者の受け入れ、2 つ目は外部人材活用、3 つ目は観光客誘致である。

1 つ目の移住者受け入れについては、10 数年前に倉輪地区のある集落に移住希望者が見学に来たことがあった。しかし、移住希望者を快く思わない、集落住民の 1 人が断った経緯がある。最近でも適切な空き家を借りることができず、移住を断念した移住希望者がいる。移住希望者の受け入れは難しい面もあるが、現在の集

落住民の多くは移住希望者への抵抗感はほとんど持っていない。ただし、移住を希望するのであれば、昔から続く倉輪地区における生活に理解を持つ、自治公民館活動に参加してもらうなどの要望がある。強い結束力を持ち相互扶助の関係を持つ集落住民達の輪に、どのように入り込むのかは移住希望者にとって高いハードルであろう。僅かではあるが、移住希望者に対して反対意見を持つ集落住民も存在することから、信頼関係の構築は慎重に進めることが重要である。

2 つ目の大学生、都市からのボランティアなどの外部人材活用については、祭の復活や普請や草刈りなどの労働力提供に期待は集まっていた。しかし多くの外部人材は、棚田周辺の傾斜での作業は不慣れである。怪我の可能性があり、危険が伴う作業の受け入れは二の足を踏んでしまう。自治公民館活動の担い手候補として、元地区住民やその子ども世代の参加を熱望する集落住民もいたが非現実的であろう。

3 つ目の観光客誘致であるが、広沢ダムで開催される水上スキー大会の参加者や大学生の合宿などで、夏場の倉輪地区は賑やかになる。しかし倉輪地区内には、観光客の宿泊施設や民泊機能は無く、長期滞在を受け入れることは難しい。年間を通じた利用で無いため、新たな観光資源の掘り起こしが必要になって来る。スポーツを通じた観光客は、倉輪地区を目的地とするリピーターにつながる可能性が高い。小さなきっかけから関係づくりに期待は持てる。

集落維持に向け、子どもなどの次世代との話し合い状況を確認したところ、話をしていると話をしていないでは同数であった。このヒアリング調査を契機に、次世代と話をしようと考える集落住民は存在した。集落の維持や将来に対する話題は、親世代も次世代も避ける事も多いが、何度も話し合いを重ね双方が納得することが大事である。話し合いをしている集落住民の意見では、子どもに屋敷や財産などを引き継ぐことを希望する集落住民、子どもに引き継がせず自分の代で整理することを希望する集落住民、子どもの意向を尊重するなど子に判断を委ねる集落住民がいた。繊細な話題であるため、親世代と次世代の双方が避けてしまうが、話し合いは早い段階で行うのが望ましい。時間的な余裕があれば、周到な準備が可能になる。親世代が亡くなると、残された屋敷や農地が放棄され朽ちてしまう。準備期間があれば、地域資源として有効利用が可能で集落の財産として引き継ぐ、もしくは希望者へ売買や譲渡などが可能になるだろう。集落住民の生きてきた証を残すためにも、話し合いは不可欠である。なお、綾町外への転居を検討する集落住民は、話し合いの必要性を感じておらず、集落の将来に対して無関心になってしまったようだ。このことからも、関心がある段階からの準備が求められるのである。

5.2　10 年後も引き続き集落で生活する上で必要な支援

2020 年度に実施された「綾の肖像プロジェクト」と「集落ビジョン策定」の 2 つのプロジェクト調査から、倉輪地区を構成する 4 集落で 10 年後も引き続き今までと同様の生活を営むために必要な支援策を提示した。4 集落の過去と現在の生活実態を把握し、この生活実態を維持するため集落住民の取り組みと綾町の支援の内容を精査し、それらを踏まえて今後必要な支援を検討した。集落維持に向けた取り組みは、集落で生活する集落住民の尊厳を大事にし、希望に寄り添うことが重要である。

改めて、過去と現在を踏まえて未来につなげるため、倉輪地区住民が生活の中で培ってきた相互扶助、結いの心、強い結束力を保てる支援に徹していきたい。生活を営む上での地域課題は早期に解決できるように、綾町の支援体制、

政策立案、予算化、外部人材確保とコーディネートできる体制整備などを進めていかなければならない。潤沢な財政や人員を有していないが、可能なことから実行に移していきたい。

高齢住民の多くは、福祉や医療サービスに関心が高い。しかし、現在利用できるタクシー利用助成制度は、あまり利用されていなかった。移動手段の確保は課題であるため、タクシー制度の利用促進に向けた理解度向上や制度説明は早急な対応が必要である。また、社会福祉協議会や病院の送迎サービスや巡回医療は、集落住民の安心感につながっている。サービスの維持は、重要な生活の支援につながっている。

生活基盤を支える安定したライフラインに加え自然災害後の迅速な復旧は、引き続き集落で生活する上で欠かせない。自己防衛として自家発電機の購入、飲料水の確保、倒木処理などを行う集落住民はいるが、脆弱なライフラインの見直しやインフラ整備は強く求められていた。現実的な問題として、綾町の多額な予算計上は難しい。集落住民の命に関わることだけに、悩ましい問題である。

最後に特筆すべき点として、普請や草刈りに外部人材を活用することには否定的だった集落住民であるが、綾町職員の支援参加を望む声が多かった。顔見知りで人間関係ができており、気軽に頼みやすいようだった。相互扶助の普請や草刈りを支援することが肝要だと考える、綾町職員は一定数いる。ただ、行政組織であるため対応の柔軟性や自由度には制限がある。その一方で、地域の中に入り込み、集落住民の支援を要望する職員の存在は頼もしい限りである。

綾町職員は自治公民館活動を縁の下の力持ちとして、常に支えてきた。今後の地域づくりに向けて集落ビジョンを報告し、その後も膝を突き合わせて意見交換を行っている。人口減少や高齢化により、諦めの気持ちが芽生えた集落住民がいる中で、前向きに支援策を模索していた。

倉輪地区の自治公民館館長の悲痛な想いとして「諦めてしまったら集落は終わってしまう。最後の１人になっても住み続けたい」というメッセージは、報告会参加者全員に伝わった。立場は異なるが、最後の１人が今までと同様の生活を営めるように、倉輪地区及び４集落の維持に向けて支援を試みたい。

注

1) 農村集落において、住民総出で共有スペースなどの清掃や保守作業を行うことである。綾町では、道普請が多く草刈りも行っている。昭和時代には、茅葺屋根の張替えなども行っていたようである。
2) 綾町における消滅危機地区は、竹野地区（9戸）、久木野々地区（8戸）、倉輪地区（19戸）、二反野地区（27戸）、割付地区（34戸）、尾立地区（37戸）の６地区となっている。
3) 綾町のホームページにて倉輪地区の肖像プロジェクトで得られた写真とエピソードが掲載されている。
https://www.town.aya.miyazaki.jp/soshiki/eco/4901.html（2024年１月15日閲覧）
4) 田の神様とも密接なつながりがあり、重労働へのねぎらいと豊作の祈りも含まれている。地域によっては、田植え後の夜に酒宴を開くことが多く、綾町では昼食を集落住民みんなで食べることが多かったようだ。各家から手料理を持ち寄ることから女性の負担は大きかったと考えられるが、女性も楽しかったという想い出を沢山聞き取ることができた。
5) 2019年末から世界的に大流行した新型コロナウィルスによって引き起こされた災難や危機的状況を説明した。

参考文献

岩佐礼子（2013）「持続可能な発展のための内発的教育（内発的ESD）―宮崎県綾町上畑地区の事例から―」『環境教育』, vol.22(2), pp14-27, 日本環境教育学会

小田切徳美（2015）『農山村は消滅しない』岩波書店

北村浩二（2014）「東海地方における中山間地域等直接支払制度の集落機能の活性化に与える影響の考察」『水土の地』, 82巻5号, pp411-414, 農

業農村工学会
小林悠歩・筒井一伸（2018）「他出子との共同による農山村集落維持活動の実態」『農村計画学会誌』vol.37,no3,pp320-327,農村計画学会
郷田實・郷田美紀子（2014）『結いの心』評言社
佐藤誠（2008）「町おこし再考―ひむか邑運動と宮崎県東諸県郡綾町を事例として―」『生活学論叢』vol.14,pp.39-52,日本生活学会
船戸修一（2021）「「他出子」の出身集落への関わり意識―浜津市天竜区佐久間町のX集落の調査から―」『静岡文化芸術大学紀要』,21巻,pp23-32,静岡芸術文化大学
堀口正（2013）「大分県一村一品運動の起源とその発展過程―集落を中心とした宮崎県綾町の自治公民館活動制度の考察より―」『龍谷大学経済学論集』, 52巻第1/2号,pp53-69,龍谷大学
劉鶴列（2003）「山間地における活性化要因に関する考察―住民の意識と行動の視点から―」『農村計画論文集』第5集,pp181-186,農村計画学会

2024.01.18.　受理

Residents Thoughts on Community Maintaining in Areas with Declining Populations

The community maintain of through mutual aid fostered by community center activities

Takanobu Matsuoka(Rural Sociology)

Abstract

The aging of the population and decreasing rural population have caused a shortage of labor and those able to take responsibility for their community. Accordingly, there are concerns about the decline of agriculture and forestry, as well as the deterioration of village functions. Typically, village functions have been expanded by community residents who help one another. Although we expect that activities for the community maintenance functionality will wane, we have explored the possibility of preserving the community by encouraging residents to help each other while receiving necessary support from outside the community. Specifically, we focused on the Kurawa district of Aya Town, Miyazaki Prefecture, where a relationship of mutual support has been established among community residents in order to community maintain life. Few studies on settlements have addressed this issue by looking 10 years into the future to gain support. Therefore, the purpose of this study was to clarify the driving force behind residents' efforts to the maintain community by incorporating a time axis. In this study, relationships were built through regular communal activities that residents had engaged in since childhood. These included playing together and attending school, which strengthened the relationship of mutual support and created a strong sense of cohesion in farming and community life. This cohesion was shown to be one of the driving forces that kept the community together.